

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	金山 和彦
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 具体美術協会が求めた児童の美的表現に関する研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	衛藤 吉則	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	関村 誠	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	後藤 雄太	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	助教	岡本 慎平	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、戦後日本において、前衛的な抽象芸術を広めた吉原治良（1905～1972）を会長とする具体美術協会（以下、具体）の会員が行った「児童への美術指導」に焦点を当て、彼らが児童美術に見出した新しい美的表現の形を、実践の分析ならびに背景となる思想の考察を通して浮き彫りにしたものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序論では、先行研究に欠如していた「具体と児童美術の関係性」の観点を指摘し、具体の活動を美術と思想の両方面から総合的に描き出すという本論文のねらいを示した。</p> <p>第1章では、具体の成立過程と当時の評価を明らかにした。具体の活動は、時代を先取りする前衛芸術的な創作活動と児童美術との関りを特徴としたが、前者は従来の評価基準に馴染まず、国内の評価対象から外され、後者も児童美術という新しい美術領域への貢献は当時、評価に至らなかった。</p> <p>第2章では、具体のリーダー吉原治良の画風の段階的な変遷について考察した。その結果、児童美術に関しては、生涯を通じて継続され、その見方が彼の代表作品《白い円》（1967）等の「円の作品」への下地となっていることを明らかにした。</p> <p>第3章では、代表的な具体作家（村上三郎、白髪一雄、堀尾貞治）の作品と児童美術との関係を描出した。また、その解明に向け、具体主催のワークショップへの参加・観察、さらには元具体会員へのインタビュー調査を行い、それらを通して各具体作家の児童観を描き出した。</p> <p>第4章では、具体の吉原らが、1948年に主催・審査した国内初の児童創作美術展である《童美展》ならびに同年に発刊され具体会員も関わった童詩雑誌『きりん』と、具体作家との関わりを明らかにした。</p> <p>第5章においては、具体をリードした吉原らに最も影響を与えたミッシェル・タピエが提唱・推進したアンフォルメル運動（第二次大戦後にヨーロッパから広がった「未定形な生の躍動」を支持する表現主義的な抽象芸術運動）の美術表現上の意義を明らかにした。</p> <p>第6章では、アンフォルメル研究で従来フォーカスされていない「タピエが求めるニーチェの遊戯論」について考察し、児童の美的表現の生成という観点に立ち、タピエを交点とし、アンフォルメル、ニーチェの遊戯論、具体の児童観を架橋する構造を描き出した。</p>			

第7章では、これまで明らかにした児童の美的表現の生成過程が、どの発達段階で有効に機能し得るのかについて、H. リード、V. ローエンフェルド、R.ケログ、文部省による描画発達段階に照らして整理した。

終章では、課題であった「具体美術協会が求めた児童の美的表現」について、本論で考察した、吉原を中心とする具体会員の理論と実践、そこに影響を与えたタピエのアンフォルメルやニーチェ思想、さらに児童の描画発達段階の観点をふまえ、各章の概要をまとめることで総合的に記述した。

本論文は、次の5点で高く評価できる。

1. 「具体と児童美術の関係性」を、具体作家の幼少期の回想や児童美術指導に関する言説、児童をモチーフとした作品、児童への造形指導の方法と内容、等の観点から総合的に考察したこと。
2. 児童創作美術展である《童美展》ならびに童詩雑誌『きりん』と、具体作家との実際的な関わりを明らかにしたこと。
3. 「児童の美的表現の生成」という観点到立ち、タピエの思想とアンフォルメル運動とニーチェの遊戯理論と具体作家による児童美術の理念・実践を関連付けたこと。
4. 児童の美的表現が、発達段階のどの部分で有効に機能し得るのかを描画発達段階に照らして明らかにしたこと、ならびに「未分化」「没我」「虚無」を特徴とする児童から生み出される美的表現の意義を浮き彫りにしたこと。
5. 美術史・美術思想研究として、近代日本の美術界をリードした具体に関する思想や実践を含む膨大な資料を読み解き、多くの関係者へのインタビューをふまえ当協会の全体像を描き出し、思想面を含め児童美術との関係を描き出したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年2月1日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size,2pages (about 500 words).)